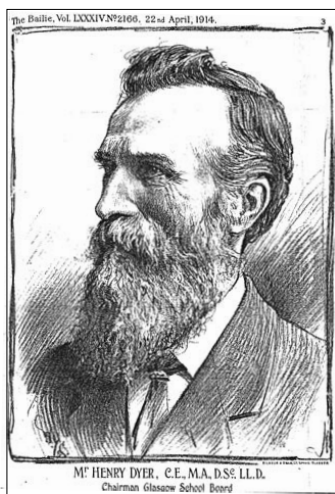
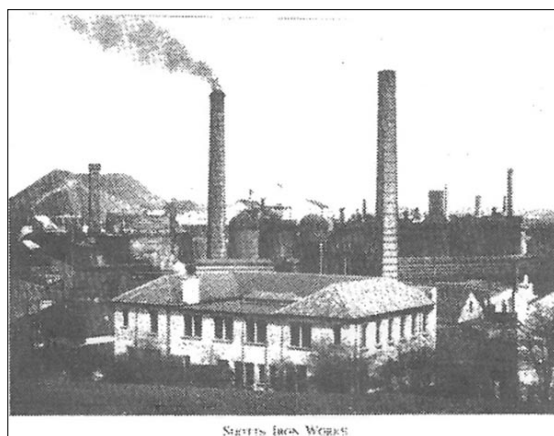


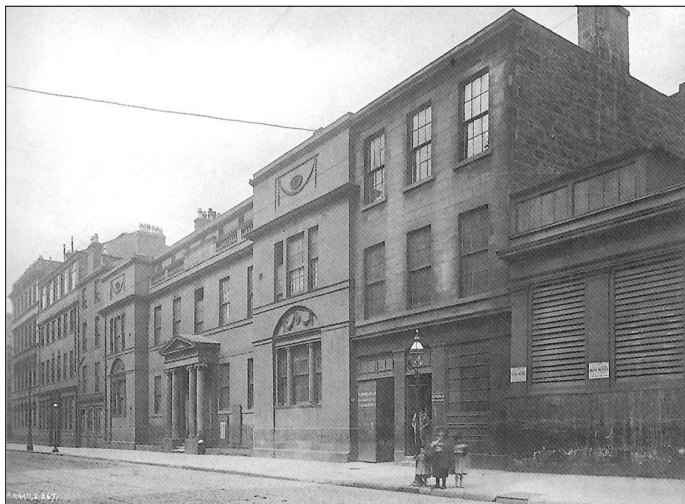
Robin Hunter, *Henry Dyer: A Scottish Engineer in Japan*,  
Amazon. co. jp, 2017.



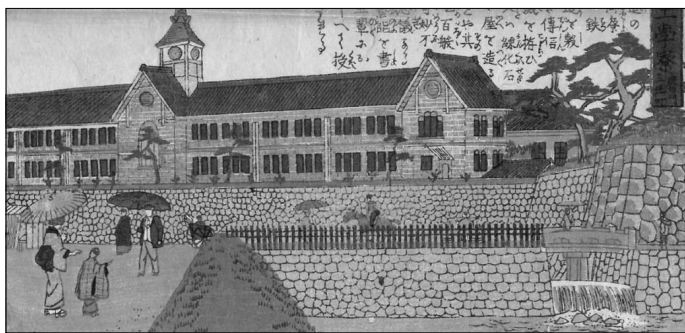
1. ヘリー・ダイアーの肖像画



2. ショッツ鉄工所



3. グラスゴー・西部スコットランド技術カレッジ



4. 錦絵の中の工部大学校

## まえがき

兄のロビン・ハンター博士が著した本書に「まえがき」を寄せることになり、うれしく思います。

兄たちと私はグラスゴーに生まれ育ちました。<sup>①</sup>子どものころ、母から親戚の有名なヘンリー・ダイアーにまつわる話をたくさん聞きました。ヘンリーの姪で大叔母のマーガリートが夏になると、わが家に滞在して、話をふくらませてくれました。マーガリートも母もヘンリー・ダイアーのことをよく覚えていて、彼の逸話を数多く語ってくれました。私たちは興味深く聞いたものですが、ある程度の誇張があるのではないかと思いました。歴史の本に彼の話は出てきませんでしたし、一九六〇年代のグラスゴーでは無名であったからです。何年もの間、ヘンリー・ダイアーは私たちにとつ

て謎の人だったのです。

ヘンリー・ダイアーについての疑問は、ロビンと私が成人してからグラスゴーのストラスクライド大学に勤務していなかったら、謎のままであったかもしれない。一九八〇年代の卒業式では著名な卒業生に言及する伝統があり、驚いたことにヘンリー・ダイアーの名前が挙げられるのを耳にしたのでした。<sup>②</sup>そこで、ロビンは一家の歴史に関心を持って調査にかかわり、ヘンリー・ダイアーについて私たちの知らない数々の事実を明らかにするようになったのです。本書によってヘンリー・ダイアーの生涯と業績について、その全体像が浮かび上がることでしょう。学術の世界ならびに実業の世界で、彼が成し遂げた素晴らしい成果が描かれています。彼はまさしく教育のバイオニアであり、またスコットランドと日本の結びつきを強力に推進した文化使節でもありました。彼がスコットランドよりも日本の方がずっとよく知られている事実を、私たちは知ったのです。

ヘンリー・ダイアーがもたらした成果は無数にあり、しっかりと記録されています。彼は輝かしい学術賞を何度も受賞しましたし、日本の専門的なエンジニア教育に対する貢献は日本政府に認められ大いに評価されました。並外れた勤勉家であり、それが創造的精神と結びついて、エンジニア教育の革新的な方法を推進するに至りました。教育や著作の面では幅広い政治・経済・文化資料の影響を受けましたし、少しも権威的な性格の人ではありませんでした。

ヘンリー・ダイアーは、その前半生では学術の面でも職業の面でも多くを成し遂げました。後半生では、日本から帰国後、能力よりも影響力を発揮したように思われますが、みずから選んでそうしたのか必要に迫られてなのかは分かりません。彼は金銭面ではまあまあ裕福でしたので、雇用のことを気にすることなく、自身の経歴を思い通りに深めて広げることにしたのか、あるいは強硬でときに無遠慮な意見のせいで、勤め口の見込みが制約されたのでしょうか。

ファミリー・ヒストリーは、深く調べれば疑問に答えられますが、また別の疑問が出たりするものです。ヘンリー・ダイアーの物語についても、確かに当てはまります。復古した明治の支配者たちが移入しようとした工業技術の発展にヘンリーが大いに貢献したことについて、子どものころに語られたことの大半が文献資料で立証されるのですが、それでもやはり彼は少しばかり謎めいた人物なのです。

読者の皆様には、本書に興味をもたれ、この「桁外れ」な人物の生涯を理解されることを切に期待しております。

レズリー・ハート

ヘンリー・ダイアー物語――日本とスコットランドの懸け橋――

目

次



口 絵	.....	1
まえがき	.....	3
凡 例	.....	11
序 文	.....	13
第一章 若いころ	.....	17
(一) 少年期	..... 17	
(二) アンダソン・カレッジの夜間学級	..... 20	
(三) グラスゴー大学卒業	..... 22	

第二章	日本における活動	25
(一)	日本へ赴任	25
(二)	結婚と家庭	27
(三)	工部大学校	30
(四)	スコットランドに帰る	34
第三章	晩年	37
(一)	グラスゴーにおける諸活動	37
(二)	日英交流の推進	40
(三)	ダイアールの死	42
第四章	ダイアールが残したもの	45

付録1	ヘンリー・ダイアー・シンポジウム―産業のグローバリゼーション ―課題・戦略・ケーススタディ（一九九六年）	49
付録2	工学教育に関するヘンリー・ダイアー・シンポジウム（一九九七年）	52
付録3	ヘンリー・ダイアーの著作（一部）	55
付録4	ヘンリー・ダイアーに関する記事・論文	63
謝辞		68
訳者注		70
年表		75
地図		81
訳者あとがき		82
索引		92

## 凡 例

- 1 本文および付録の中の（ ）は原著者のものである。訳者の補注は「」に入れた。
- 2 原著には、注はない。訳出にあたって、本文中に（1）から（36）までの注番号を付し、巻末に「訳者注」を設けて補説した。

- 3 口絵の写真は、原著にはない。訳者が原著者と協議のうえ、左記の四点を選定し添付した。

- （一）「ヘンリー・ダイアーの肖像画」(*The Ballie*, vol. LXXXIV, no.2166, 22 April 1914, p.3)
- （二）「ショッツ鉄工所」(訳者蔵)
- （三）「グラスゴー・西部スコットランド技術カレッジ」(Butt, J., *John Anderson's Legacy, The University of Strathclyde and its Antecedents 1796-1996*, 1996, p.93)
- （四）「錦絵の中の工部大学校」(三代歌川広重『東京諸官省名所集 工学寮』明治九)